

った人たちです。

そうした作家たちの多くは、京都の小学校に通っていました。卒業しても自分たちの母校を誇りに思い、芸術家として大成した後は母校への作品寄贈を行って、母校に錦を飾ったのです。

明治から昭和にかけて、近代の美術界で活躍した作家たちの中には京都出身の人間が少なくありません。京都に生まれ、幼い頃から書画や染物、織物、焼物といった京都の美術工芸品に触れて育

作家たちの母校への思いが感じられる寄贈作品が、今も小学校にたくさん残されています。

陶芸家、書家、美食家など多彩な顔を持ち、大

正・昭和を代表する文化人であった北大路魯山人

は、中京区の梅屋敷を1893(明治26)年に卒業しました。

その後、1958(昭和33)年に京都で個展を開いた際、母校を訪れ「不老長寿」の銘が入った花入れを贈りました。その

洋画家の安井曾太郎は、懐古談に花を咲かせたと言います。

## 大成、母校に錦を飾る

中京区の生祥校を卒業。物の像をよく作り先生に褒められていたと言います。

「在学中はおとなしく目立たない子どもで、算術がよくできた」と旧友は語っています。京都の聖護院洋画研究所に学び、後に文化勲章を受章する画家になりました。

1917(大正6)年に母校へと寄贈された「カーネーション」という作品が伝えられています。

京都画壇を代表する画家の山口華楊は下京区の格致校を12(明治45)年に卒業しました。粘土細工が好きな子どもで、動

「凝視」を贈りました。寄贈された作品は、京都に育った芸術家たちの学校時代の思い出とともに今も伝えられています。

(京都市学校歴史博物館 学芸員 森光彦)



北大路魯山人「飴釉不老長寿花生」(1958年ごろ、元梅屋小蔵) 京都市学校歴史博物館提供



山口華楊「凝視」(1962年、洛央小蔵) 同提供

北大路魯山人「飴釉不老長寿銘花生」は常設で、山口華楊「凝視」は12月16日まで学校歴史博物館(下京区)で展示しています。